

種痘して鏡から出る夜のひかり

藤田湘子

種痘とは懐かしいひびきである。小学校の頃、二の腕に注射されて、白い丸い痕が残った。「ほうそうのあと」と呼んでいた。法定伝染病である天然痘の予防接種で、生後一年以内、小学校の入学前、小学校の卒業前に行った。春の季語で傍題に「植疱瘡うえぼうそう」とある。

昭和四十四年作。平成十二年に書かれたこの句の自註には、「『俳句』に「私詩からの脱出」を書くのは昭和四十五年四月号だが、その実験的詩作は四十二、三年ころから始まり、この年におよその輪郭が纏めた。私は俳論を書き、試作し、又俳論を書きして前へ進もうとする。」とある。境涯俳句からの脱却を試みていた湘子に見えた物が「鏡から出る夜のひかり」だったのだろう。

1969年 (S44作) 第三句集『白面』 鑑賞・野本京